

「全能感」と喪失

映画「溺れるナイフ」

と

野外劇「日輪の翼」

2016年熊野大学

すずきかおり

中上健次が生前に「卒業する時は死ぬ時」と銘打って故郷・和歌山県新宮市に興した「熊野大学」の夏期セミナーに私が始めて参加したのは、2013年の「中上健次、半島、宿命」の回になる。

この年は、私が日ごろ大学院（まだ修士だった）でお世話になっている先生お二人が講師として招かれていたのだが、そのお一人から「朝、起す係の助手で来ないか」というお誘いを受けての参加だった。

熊野大学のセミナーといえば、中上研究者であっても参加することに躊躇する面がある。

それは数々の「伝説」。例えば、一癖も二癖もある独特の「熱」を持った参加者たちとそれに負けない講師陣、その間で繰り広げられる口角泡を飛ばしての激しい討論、酒の席での暴力沙汰……、等といったことなのだが、これはそのまま中上自身が起してきた「伝説」と重なっていることが、ここに書いていて改めて気が付いた。興した人、その人の気風が集まった人にも伝染している。いや、だからこそその集まりと言うべきなのか……。

それはさておき、そんなこともあり自分も「そんな激しい集まりになんか、とてもじゃないけど参加できない」と躊躇をしていたのだが、いざ参加をしてみると、そのような「伝説」はどこへやら。非常に穏やかだけれども濃厚な楽しい時間を過ごすこととなった。（ちなみに、「伝説」のように激しかったのはだいぶ昔のことで、最近はとても穏やかな集まりとなっている。）

ここでの縁がきっかけで、その後「熊野大学聴講生による熊野を語る東京の会」、略して「くまくま会」に編集委員として参加し、熊野大学を通じての人脈が広がることとなり、その結果、2015度の熊野大学「戦後70周年—中上健次 平和と戦争—」の3日目に研究発表をさせてもらうという機会にまで恵まれてしまって、今に至っている。

今年、2016年の熊野大学は8月5日から7日までの3日間で行われた。今年の中上健次生誕70年ということもあり、講師陣及びプログラムが豪華なこともあってか、高額とも言える¥33,000のチケットはすぐに完売してしまったようだ。中上を語る上で欠かせない「朋輩」である柄谷行人をはじめ、中上作品に言及した論文を数々発表している浅田彰、斉藤環、生前の中上に可愛がられた田中康夫、中上に小説家として「スカウト」された中森明夫等々による講座。それに、山戸結希監督「溺れるナイフ」の先行上映にアーティストのやなぎみわ演出による野外劇「日輪の翼」の観劇、女性文学研究者による研究発表が加わるというタイトなプログラム構成であった。

ここでは映画「溺れるナイフ」と野外劇「日輪の翼」について感じたことを、熊野大学セミナー内の各講座と絡めて論じて行きたいと思っているが、奇遇にも両方とも女性表現者による作品評となった。柄谷行人は久々の熊野大学での出講にあたり、「僕が前に出た時と変わっているのは、若い女性の参加者が増えたことだ」と言っていたが、中上作品を取り巻く状況が年齢や性別を超えて変化していることの表れであろう。

なお、概要にもあるように「ネタバレ」と思える箇所があるかも知れないが、論者本人はどこがネタバレなのか分からないので、そのあたりはご容赦いただければと思う。

## 映画「溺れるナイフ」考

---

熊野大学初日のプログラムとして、「「新世代ファンタジスタ」「日本映画界の大型ハリケーン」と称され、今最も注目される若手映画監督である」（「溺れるナイフ」公式HP <<http://gaga.ne.jp/oboreruknife/>>より）山戸結希監督の映画「溺れるナイフ」の先行上映が行われた。

原作はジョージ朝倉の同名人気マンガで、「別冊フレンド」（講談社）にて2004年10月から2013年12月まで連載され（コミックスは全17巻）、映画の正式なロードショー開始は11月に予定されている。なお、私は原作のマンガを読んでいないどころか存在すらも知らず、事前の知識は今をときめく菅田将暉が出ている位なもので、「ものすごくドレスコースの志磨遼平に似せた俳優が出てな」と思ってエンドロールを見たら本人だった、という始末なくらいに何も知らずに作品を鑑賞した。従って、ここでは今ネット上で叩かれているマンガ（アニメ）原作の実写化問題とか原作と映像作品の比較には言及はしない。いや、できない。映画「溺れるナイフ」そのままの印象記しか書けないことを了承していただきたい。

上映に先立って行われた文芸評論家の市川真人、山戸監督、脚本を担当した井土紀州によるプレトークイベントでは、「なぜ熊野大学でこの映画が先行上映されるのか？」という理由が説明された。確かに、熊野大学のコンセプト、と言うか中上健次が放つイメージ（本人&作品を含めて）と少女マンガ原作のローティーン向けの青春映画である本作がかけ離れた存在であろうことは否定できない。セミナー聴講生の中でも、映画の上映について疑問を持っていた人は少なからずいたようである。しかし、そこには予想だにしない「中上の」というキーワードが作品中に潜んでいたことが市川と井土より述べられたのだった。

原作者のジョージ朝倉は中上作品の熱心な読者らしく、「溺れるナイフ」にも中上作品を彷彿とさせる設定が数々見受けられるらしい。山戸監督は舞台となる架空の地方小都市「浮雲町」を新宮市をはじめとする南紀の複数の場所でロケーションを行っているが、その設定を始めとし、コウちゃん（菅田将暉）は中上作品に出てくる「中本の一統」（「高貴で澱んだ血」を持つ歌舞音曲を嗜み、短命の宿命を負っている美しき若者たち）の若衆であり、コウちゃんが松明を持って舞う祭りは新宮の神倉神社で行われるお燈まつりを連想させる。また、夏芽（小松菜奈）とコウちゃんが初めて出会う場所が、「神さん」がいるとして地元の間人は近づかない神聖な海岸なことは小説「火まつり」等で描かれ、夏芽とコウちゃんが度々一緒に川や海に飛び込むのは、中上が好んで使用した〈水〉のモチーフを思い出させる等々……、挙げてみれば沢山出てくる。

映画の率直な感想としては、40をとくに過ぎた自分にとっては、恥ずかしくなるほどの「甘酸っぱい青春映画そのもの」ということだ。あらすじを超・乱暴にまとめると、両親の事情でしぶしぶ東京から田舎に引っ越してきた女の子が不思議な雰囲気の子と「神さん」の場所で運命的な出会いをして恋をするが、ある事件がきっかけとなって「オトナの階段」を登ることになる……、という「ビルドゥングスロマン」的な内容となっている。

市川は、セミナー2日目に行われた特別講座「「溺れるナイフ」と中上健次」の場でプレトークの際に触れた「中上の」なものについて、柄谷行人による『枯木灘』の解説（小学館文庫版）で

述べられている「中央と周縁」≡周縁である地方のきしみと近代文学（「誰もに、何者かになる（なりたいと願う）ことを求める時代」への変化）を踏まえつつ、映画を「全能感を失った若者たちがいかにしてそこからもう一度立ち直れるか」という物語であるということ。“墮天”、“全能感の喪失”は中上健次に刻まれている」（WEBサイト「映画ナタリー」

〈<http://natalie.mu/eiga/news/197351>〉より）と解説している。

コウちゃんと夏芽、2人が一緒にいるからこそ溢れる「全能感」（心理学用語で「自分が何でもできる」という感覚を意味する。特に子どもの発達段階において、しばしば見られる現象である。—Weblioより）は、ある事件をきっかけに崩れてしまい、コウちゃんはやり場のない暴力へと逃げ、夏芽は周囲から距離を置き、心を閉ざすようになってしまう。この挫折を経ることで、2人は子どもではなくなってしまうのだ。かつて江藤淳は『成熟と喪失』（1971年）の中で、「成熟することとは、何かを失うことだ」としているが、この「何か」の一つに子どもが持つ「全能感」が当てはまると考えられる。若さゆえの根拠のない「全能感」の根っこにあるのは、純粹で暴力的なまでの「無知」だ。何も知らないからこそ生み出すこのできる「無双状態」なのであり、経験によって「知恵」が付くとそれと同時に臆病になり「全能感」は失われてゆく。前述した「オトナの階段」を登るということは、まさにそのことを指すのだ。

また、2日の特別講座よりプレトークの3人に加わった作家の村田沙耶香は、「目立たないタイプの主人公ではなくあえて目立つタイプの主人公で描くというのが新鮮でした」（WEBサイト「映画ナタリー」〈URL同上〉より）としているが、その通りで、主人公の男女が学校（クラス）のヒエラルヒーの頂点に立っている存在であり、終始その2人を中心にして物語が進むのは、従来の物語にはあまりない視点である。夏芽は都落ちしたとは言え超絶美少女の人気モデルで、コウちゃんは土地の神事を司る有力者の息子で美少年なのであり、必然的に2人は他の少年・少女たちとは違う「選ばれた者」の立場にある。その2人を傍らで静かに見ているのが、平々凡々な生徒、ヒエラルヒーで言えばド真ん中かそのちょっと下あたりに属する大友（重岡大毅）とカナ（上白石萌音）だ。大友はコウちゃんの幼馴染で、心を閉ざした夏芽を何かと気にかけており、カナはコウちゃんに淡い恋心を抱きつつ夏芽に憧れていて、自分の気持ちを隠して2人の恋を応援している。従来の作品であれば、この2人、特に少女マンガであれば読者の感情移入のしやすいカナの方が視点の中心に置かれ、〈地味キャラ→派手キャラ〉という方向性の恋愛模様が描かれたたであろう。

しかし、カナが夏芽が「全能感」を失ってヒエラルヒーの頂点から凋落した後に「デビュー」を果たし、最後には夏芽に一生消せない強烈な「業」を背負わせていることは、この作品が単なるローティーン向けの映画と一線を画している骨太な部分であろう。井土は、このある意味「女」のいやらしさをリアルに体現したようなカナを絶賛し、脚本製作中も「カナ推し」でどんどん登場させたが、山戸監督に言われて泣く泣くカットしたそうである。この大人になると分かるカナの持ついやらしさは、映画のターゲットである「全能感」溢れる世代の観客にどのように映るのか、気になるところである。

市川がセミナーにおいて配布した資料には、作品に対して「ときにまた、ステレオタイプでありながら」という評がされているが、確かに映画には少女マンガ原作のセオリーが充満している

。先行上映会後に行われた浅田彰と田中康夫の「憂国呆談LIVE」において、浅田彰は主人公2人を含めた人物たちの設定について、従来の型どおりの設定だったと指摘している。夏芽は隙だらけ（だからモテる）で、恋愛対象者であるコウちゃんへの依存が激しく1人では何も決められないことは、少女マンガに登場するヒロインにはよくあるタイプだ。また、コウちゃんがミステリアスな光を放つ「月」なら、大友は明るくまっすぐ光る「太陽」であり、裏表のない「イイヤツ」に終始している。そして、夏芽が事件の犯人に言われた誘い文句は小学生でもひっかからないような幼稚な内容なので、観客にはその後展開が分かってしまう。そんな「ステレオタイプ」な設定が盛り込まれているが、恐らく山戸監督はわざとそのような部分を残したのであろう。それは彼女が持つ少女マンガ、ひいては原作者であるジョージ朝倉へのリスペクトに他ならないのではなかろうか、そう感じたのであった。

熊野大学からの帰路、新宮から名古屋まで行く高速バスに乗ったのだが、途中の尾鷲から高校生くらいの金髪の少年と、いかにも垢抜けない地方都市の少女といった出で立ちの少女二人が乗ってきた。バスにはそこそこの人数が乗っていたが、三人は周囲にはばかることなく延々と内容の全く無い話を大きな声でし続けていた。普通なら耐えられないであろうが、映画「溺れるナイフ」を見た後だったので、「全能感」溢れる時期であろうその三人が、いつかはそれを失うことに思いをはせ、期間限定の「全能感」をせいぜい楽しんで欲しいと願ってしまったのであった。

。

映画「溺れるナイフ」が若者特有の「全能感」とその喪失を描いたものであるのなら、やなぎみわ演出の野外劇「日輪の翼」は「全能感」で満たされてた「路地」という空間を失うこととなった、社会的ヒエラルヒーの底辺にいる者たちの再生の物語だ、と言えよう。

「路地」とは、中上健次の「熊野サーガ」と呼ばれる作品群には欠かすことのできないトポスのことであり、中上の故郷、新宮市内にあった被差別部落がモデルとなっている虚構空間のことを指す。ここに暮す人々は被差別者、社会的弱者であるのだが、差別の歴史的な背景や暮す人間の生と死と性、またそこに跋扈する様々な〈ざわめき〉をも含めた混沌の全てを受け入れる〈懐〉を持った「路地」に抱かれることでその「全能感」を感じ取り、独特のユートピア（決して幸せばかりではないが）としての空間が形成されている。

サーガの「路地」は、史実と同様に同和政策の一環として行政が再開発を行うこととなり、解体し消滅する。劇の原作である小説『日輪の翼』は、その解体によって生れて初めて「路地」から出た（出ざるを得なくなった）オバ（老婆）たちと、「路地」の若衆であるツヨシと田中さんの2人が改造をした冷凍トレーラーで日本の聖地を旅するロード・ノベルとなっており、野外劇「日輪の翼」はこの同名の小説に加えて、「路地」の「業」として兄妹で道ならぬ恋をし破滅的な最後を迎える「兄弟心中」がモチーフとなっている『紀伊物語』の「聖餐」と、復員した青年（オリエントの康）が「路地」を出て南米に新天地を求めようとする姿を描いた『千年の愉楽』の「天人五衰」がモチーフとして加えられている。

私はこの熊野・新宮での公演を前に、横浜の赤レンガ倉庫広場で行われた公演を一足先に観ている。この劇は、セリフと役者の動きから構成させる通常の演劇とは違い、浅田彰がセミナーにおいて「サーカス」と評したようにポールダンスを始め、エアリアルのアクロバット舞踊、歌謡ショーばりのきらびやかな舞台上で生演奏とともに歌われる歌、中上が愛した韓国の舞踊サムノルリの音楽等々ありといったてんこ盛りの内容となっている。

横浜公演は6月24～26日という関東地方では梅雨真っ只中の時期に行われたのだが、案の定、24日と25日は風雨の影響を受けて、全ての演出を行うことができなかつたらしい。特にクレーンからロープや布を下げて行うエアリアルは、風の影響をモロに受ける（ただでさえ海っぺりなので風が強い）ため、両日ともにできなかつたようだが、私が観劇をした26日は雷注意報がでて開演が危ぶまれたが、ふたを開けてみると多少の海風は吹くもののコンディションは比較的良好で、エアリアルを始めとした様々な演出は滞りなく行われ、台湾で造られた「これでもか」と電飾で飾ったトレーラーを舞台にした「デコトラ舞台」も、ビカビカと光を放っていた。なお、蛇足ではあるが、以前にTBSの深夜番組「クレイジージャーニー」で「奇界遺産」フォトグラファターの佐藤健寿が台湾のデコトラ舞台文化を取材した放送を見たのだが、この台湾のデコトラ舞台が野外劇「日輪の翼」のデコトラ舞台そのままであった。台湾では、葬式等の寺の行事でデコトラ舞台上で野外劇と同じくセクシーなお姐さん方がポールダンスを披露する風習があるそうで、「路地」に充満している生と死と性が舞台上にリアルに展開されているようで興味深い。

横浜公演はとても素晴らしかったし、新宮で再度、この劇が観られることにワクワクもした。

しかし、何か足りないような気もした。それは熊野での公演を観て分かった。

公演は夕方のまだ日の出でいる時間から始まり、やがてだんだんと暗くなってゆく。3場の「熊野一伊勢」の場面で、熊野の「路地」から伊勢へ向かうオバラが、野外劇場の背後に見える山の間に実際に消えてゆく夕日に向かって以下のように言う。

「ここが境目なんかいね。」

「境目と言うてなんの境目じゃろ。」

「熊野と伊勢の境目じゃ。」

「ほら見てみ。日輪様がキレイじゃね。」

そしてオバラは沈み行く太陽を拝むのだが、オバの一人がこう言う。

「熊野の山に、お日さんが沈んどるんじゃわ。」

オバラが現実に熊野の山に沈む「日輪」を拝むことの意味！このことに思いを馳せるだけでも、この公演を新宮で行った価値は充分にあるであろう。私は、虚構と現実が交錯したこの瞬間に鳥肌が立った。この野外劇は自然の中で行わなければならない。だから、横浜の赤レンガ倉庫広場という人工的な場所ではキレイ過ぎたために物足りなかったのだ。この、コントロールができない自然が常に隣にいることへの想いについては、私がとやかく書くよりもやなぎが公演終了後に熊野大学へ寄せた[メッセージ](#)を読めば痛いほどに伝わる。中上作品においても、熊野の自然は人間に対して容赦なく手厳しい存在としてある。だからこそ、人間はそこに挑むのではないのだろうか。

そして太陽がとっぴりと沈んだところで、デコトラに施された電飾の威力が発揮され、失われた「路地」をめぐる物語が光あふれる舞台で再生される。

観劇に先立ったセミナーの講座において、登壇した中森明夫が小説『日輪の翼』のオバたちに対して「まるでアイドル・グループだ」といった突飛とも思える指摘をしていたが、あながち間違っていない。小説でも舞台版でも、オバたちは拠り所にしてきた「全能感」の空間である「路地」を失ったとは思えないほど生き生きとしており、それはその姿が老婆であることを忘れてしまうくらいに〈ガールズ・グループ〉的であって、ツヨシと田中さんが旅先で拾った女とセックスしかすることながくて段々と疲弊してゆくのは対照的に描かれている。オバラは、移動のトレーラーの中では「外食はメニューが読めないし、口に合わない」と言って（オバラは文字が読めないのだ）、常食である茶粥を炊き、「路地」の過去に思いを馳せつつ飽きないおしゃべりを続け、聖地に着くと竹箒で寺社の掃除をし、御詠歌を口ずさむ。そう、オバラは喪失した「路地」での日常や彼女たちが思い描いていたルーティーンを行うことによって、そこに失われた「路地」を再生しているのだ。だからオバたちは「路地」に溢れていた「全能感」を取り戻して生き生きとしているのである。

しかし思えば、中上作品における女性の登場人物は誰もが力強く、瑞々しい。「日輪の翼」のオバラは言うに及ばず、「路地」の語り部のオリュウノオバ、『紀伊物語』の道子、「男と女は五分と五分」という恋愛哲学（←「溺れるナイフ」の夏芽に教えてやりたい！）を持った『軽蔑』の真知子等々。中でも最強なのが、中上自身の母をモデルにした『鳳仙花』等に出てくるフサであろう。それは、誰かがフサのことを「ポカリスエットのCMに出てきそう」と評したほどな

のだ。いずれの女性たちも、「自律」をした女性として物語りに描かれている。

方や男性の登場人物はと言うと、女性とは対照的に破滅的な道をたどる人物が多い。渡部直己は「熊野サーガ」を代表する主人公・秋幸に「うつほ」という空洞があるとしているが、男性主人公たちは何かしらの欠落を抱えている場合が多く見られる。「日輪の翼」のツヨシも田中さんも、美丈夫のイイ男で旅先で女に事欠くことがなくセックスに明け暮れるが、オバラとは違って「全能感」の空間を再生できないことで、結局は満たされることなく空虚でむなしい日々が続く。最後にトレーラーは皇居の前にたどり着くのだが、ここでオバラとツヨシらは離れ離れになる。オバラは「天子さま」がいる東京をも「路地」にしようとし、ツヨシらは旅で広がった空虚を埋めるべく新宿でホストの仕事に就くこととなるのだが、続編の小説『讃歌』にその後の物語は受け継がれている。

この熊野の公演の中では、中上健次の誕生日（8月2日）を祝うサプライズ演出があった。オバラが野外劇場内をバースデー・ケーキを担ぎながら歩き、劇中でタエコ等を演じるポールダンサーのMECAVが、中上健次が歌う「アンコ椿は恋の花」をバックにデコトラ舞台上で妖艶なポールダンスを披露したのだ。熊野の宵闇に流れる中上の歌声を聴いて、なぜだか涙が出てしまった。悲しみでも、嬉しさでも、感動でもない不思議な涙。まさか、作家の歌声に涙する日が来るとは予想だにしていなかったもので、自分にとってもサプライズになった。ちなみに、中森を始め、セミナー受講生も何人かは歌声に「ウルっ」ときたらしい。中上の歌声と熊野の空間が合わさると、不思議な力が生み出されるようだ。

やなぎは熊野公演の終了後の挨拶で「私に豊かな時間を与えてくれたケンジノアニ、おおきによ。ここでは一回きりの公演でしたが、今後は高松、大阪を周り、来年は九州にも東北にも行きたい。できれば日本から出て、それがケンジノアニがやってほしいと言ってることだと思えます。」（紀南新聞WEBサイト：<http://www.kinan-newspaper.jp/?p=3843>）と、これから先もデコトラ舞台の旅を続けて行きたいと希望を述べた。これは期待するしかなだらうい。舞台という「生もの」と、自然という「生もの」がぶつかり合う現場は一見すると癖になって、飽きることはないのだ。

2016年の熊野大学で行われた映画「溺れるナイフ」の先行上映会と、野外劇「日輪の翼」の感想を述べた。

今回の熊野大学は、「はじめに」にも書いたように盛りだくさんのプログラムを詰め込んだ、生誕70年記念にふさわしい大掛かりなセミナーとなったのだが、実は来年、2017年は没後25年の記念に当たる。何か行われるのか期待しているが、それにしても、中上が生きていたとしたら70歳、バリバリの現役作家であって当然な年齢である。中上の先輩である大江健三郎や古井由吉、熊野大学に招聘した瀬戸内寂聴らがまだ現役で作家活動を行っていることを考えると、その早世に想いを馳せずにはいられないのだ。

(了)

「全能感」と喪失—映画「溺れるナイフ」と野外劇「日輪の翼」 2016年熊  
野大学印象記—

<http://p.booklog.jp/book/108916>

著者：すずきかおり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bellwoodkao-gao/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108916>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108916>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ